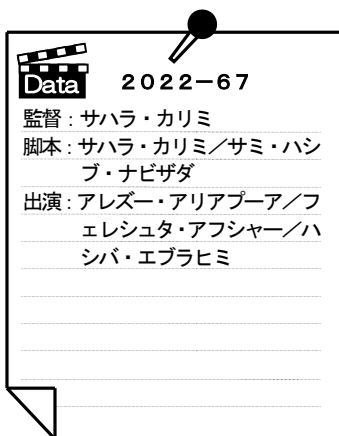




👁️👁️ みどころ

女性差別はどの国でも、どの時代でも同じだが、イスラム教の下では？アフガニスタンでは？アメリカが“世界の憲兵”の役割を果たしたアフガニスタン戦争は2021年8月に終結したが、その後の悲惨な現状は？

3人の女性の生き方をオムニバス風に描く本作は、たしかに「明日になれば」「アフガニスタン」「女たちの決断」という3つのキーワードを表現しているが、その出来は？

中国のTVドラマ『30女の思うこと～上海女子物語』や濱口竜介監督の『偶然と想像』（21年）に見る3人の主人公たちと比較してみるのも一興だが・・・。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

■□■原題は？なぜこんな長い邦題に？■□■

本作の原題は、『Hava, Maryam, Ayesha』。これは2021年8月30日のアメリカ軍の全面撤退によって、イスラム原理主義組織タリバンに制圧されたアフガニスタンの首都カブールに生きる3人の女性の名前だ。

すなわち、本作は、①義父母の面倒を見ながら家事に追われる孤独な妊婦ハヴァ（アレズー・アリアプーア）、②7年間浮気し続けた夫と離婚を決意するも、妊娠が発覚した高学歴のニュースキャスター、ミリアム（フエレシュタ・アフシャー）、③妊娠したと同時に姿を消した恋人がいながら、いとこのプロポーズを受け入れた18歳の少女アイーシャ（ハシバ・エブラヒミ）、という年齢、生活環境、社会的背景が異なる3人のアフガニスタン女性のはじめて直面する人生の試練をそれぞれ描いたオムニバス映画だ。

原題だけでは何の映画かサッパリわからないため、そんな本作の邦題は、『明日になれば～アフガニスタン、女たちの決断～』とバカ長いものにされたが、それは本作のエッセンス（キーワード）を明示したかったため。まさに本作は、前述した3人の女性の生きざま

を通して、「明日になれば」「アフガニスタン」「女たちの決断」という3つのエッセンスをぶち込んだものだが、そうかと言って、この邦題の出来はイマイチ・・・？

■□■アフガニスタンでの女性の地位は？どこで撮影を？■□■

日本を含む西欧民主主義諸国では、今や「法の下での平等」や「男女平等」は当然のこと。しかし、イスラム教では？アフガニスタンでは？カブールを制圧したタリバンは、それまで女性の地位向上に取り組んできた女性問題省も廃止し、記者会見で、タリバンの報道担当幹部は、女性の権利は「シャリア（イスラム法）の枠組みの中」で尊重されると発表した。その意味は？

私は、5月10日に観た『メイド・イン・バングラデシュ』（19年）では、バングラデシュの首都ダッカにある劣悪な労働環境の縫製工場で立ち上がった勇敢な女性を知り、5月19日に観た『グロリアス 世界を動かした女たち』（20年）では、1960年から70年代にアメリカで大活躍した女性解放の活動家を知った。しかして、本作はアフガニスタン映画機構初の女性会長の務めるサハラ・カリミ監督が、前述の問題意識で脚本を書き、監督したもので、その撮影はすべてカブールで行ったそう。アメリカ軍が完全撤退し、タリバンの全面支配が復活した2021年8月以降の首都カブールでは本作のような問題意識の映画の撮影は不可能だから、本作の撮影は実にタイムリー。そんな意味でも、私は本作に注目！

■□■3人の主人公たちそれぞれの物語は？映画の出来は？■□■

女性の地位の男性に比べての低さは、一部で実施されていたという「母系社会」を除けば、どの国でも、どの時代でも同じ。その原因は、“家父長制度”だけではなく、宗教上のものも多い。キリスト教でも男女差別は明らかだが、イスラム教のそれは顕著だから、イスラム教が支配するアフガニスタンの女たちの生き方が、それによって大きく制約されていたのは仕方ない。

アフガニスタン戦争は、アメリカが“世界の憲兵”として敢行した戦争の最長のもので、民主化が進んでいた当時のアフガニスタンには「女性問題省」が設置されていた。したがって、そのまま民主化が進めば、今の日本と同じような男女同権社会も夢ではなかったかも・・・？いやいや、そんな淡い期待がナンセンスだということは、本作を観ればよくわかる。そのうえ、2021年8月に、いかにトランプ前大統領の政策の承継とはいえ、バイデン新大統領があっさりとして現地の大混乱を無視して、アメリカ軍の撤退を実現してしまうと、その後の悲惨な現状は・・・？

本作はそんな3人の女性を主人公とする3つのオムニバスで成り立っているが、合計83分の映画だから、それぞれの物語はそれほどインパクトのあるものではなく、“それなり”のもの。したがって、映画の出来としてはイマイチだが、1つの事例としてしっかり参考にした。

■本作 VS 中国の現代ドラマ、濱口竜介監督最新作！■

私は、ここ数年来ずっと『三国志』関連をはじめとする中国の時代劇ドラマにハマっているが、他方、現在BS12で放送中の現代ドラマ『30女の思うこと～上海女子物語』にもハマっている。これは、華やかな上海を舞台に、恋に仕事に家庭に奮闘する3人の女性たちの“リアル”と友情を描く大ヒットラブストーリーだ。また、『ドライブ・マイ・カー』（21年）『シネマ49』（12頁）に続く、濱口竜介監督の最新作『偶然と想像』（21年）『シネマ50』（163頁）は、「偶然と想像」を統一テーマにした3つの短編だが、そこでも3人の女性たちが何かと大奮闘するストーリーがメチャ面白かった。

女性の地位が抑圧されたアフガニスタンでは、それらと同じようにいかないのは仕方ない。しかし、それでも本作に見る3人の女性主人公たちの頑張りはすごいし、最後の決断は、あつと驚くものだ。時代も国も違うものの、本作と『30女の思うこと～上海女子物語』や『偶然と想像』との比較も面白いのでは？

■“明日になれば” VS “明日があるさ” ■

かつて“スキヤキソング”こと『上を向いて歩こう』を歌ってアメリカでも大人気になった歌手が坂本九。彼のヒット曲は多いが、その一つが私が中学生だった1963年に発売された『明日があるさ』だ。同曲は、2001年、吉本興業所属のお笑いタレントで結成された音楽ユニット「Re:Japan」（リ・ジャパン）が歌って大ヒットしたから、今ドキの若者も同曲を知っているはずだ。青島幸男作詞、中村八大作曲による同曲は、自分に自信が持てず、意中の女性に恋心を打ち明けられないにもかかわらず、前向きに日々を過ごす男子学生の思いをコミカルに表現したもので、あくまで“前向きソング”だ。

それに対して、本作のタイトル「明日になれば」は、それほど前向きではなく、何かの変化があるかもしれないという期待を込めたレベルだ。しかして、「アフガニスタン」「女たちの決断」「明日になれば」という3つのキーワードをタイトルにした本作では、3人の女たちが最後に下す決断はたしかにすごい。しかし、それが本当にいい決断なのかどうか、そして彼女たちの明日からの人生がホントにそんな決断どおりに歩めるのかどうかは、正直なところわからない。

2017年に急速に盛り上がった香港の雨傘運動＝民主化運動が、今や完全に抑圧されている現状を見れば、タリバンが再支配し、女性問題省も廃止された今のアフガニスタンで、本作の3人の主人公たちはどう生きてるの？香港では、“自由の女神”ことアグネス・チョウも、人気女性歌手デニス・ホーも逮捕されてしまったが、「明日になれば」と考え、それぞれの決断をした本作の3人の主人公たちは、今どうしているのだろうか？

2022（令和4）年6月3日記